

京都の地蔵盆における地域共同体の「想像力」

前田昌弘

1. はじめに：地蔵盆を通して「再発見」される地域コミュニティ

2000年代後半から2010年代にかけて、京都市内の各地で地域住民によって続けられている行事として地蔵盆の存在が確認され、注目されてきた。昨今、少子高齢化、生活様式の変化を背景として地域の行事が簡略化・廃止の一途をたどるなか、地蔵盆は唯一と言ってよいほど市内のほぼ全域で続いている年中行事である。京都市が2013年に行った調査によると市内の約79%の町内会・自治会が地蔵盆を開催している¹。地蔵盆とは、毎年8月23日、24日を中心として地域住民が地域の地蔵菩薩を祀り、町内の安全や子どもの健やかな成長を祈る行事である(図1)。全国的な知名度こそ高くないものの、京都府と周辺の府県(滋賀、奈良、大阪、兵庫、福井)では盛んであり、京都の人びとにとって地蔵盆は夏の風物詩として馴染み深い。地蔵盆の始まりと変遷の詳細は意外にもこれまでほとんど知られて来なかったが、近年は地蔵盆への関心の高まりとともに研究・調査の成果が蓄積されつつある²。上述した市の調査もまた、地蔵盆の開催状況をはじめて市内全域にわたって把握したものである。



図1 地蔵盆の様子：普段は町内の祠(右)に安置している地蔵を祭壇に祀り、住民が子どもたちと地蔵を囲んで様々な行事をしながら一日を過ごす(左)。

地蔵盆への注目の高まりは、市独自の制度である「京都をつなぐ無形文化遺産」への登録をはじめ、「京都市レジリエンス戦略」や「京都市 SDGs 未来都市計画」といった都市戦略の中で地域のコミュニティ形成の基盤となる生活文化の一つとして地蔵盆が言及されていることから窺える³。

このように、近年の京都における地蔵盆をめぐる動きは、地蔵盆を通して、地域コミュニティの存在や意義を「再発見」する契機となっている。ところで、地蔵盆はたしかに、上述の都市戦略が期待を寄せる「地域のコミュニティ形成」に寄与しているかもしれない。しかし、それはあくまで結果としてであって、地蔵信仰は本来、個人的な信仰としても完結しうるものである。それが地蔵盆という行事の形態をとり、他者との関わりや地域のコミュニティ形成にも関わってくるのはなぜだろうか。地蔵盆の起源は遅くとも江戸中期まで遡ると言われ、そういった歴史性を帯びた生活文化における人と人、人びとと環境、世界との関係の結び方に対する理解なしに、現代の価値観だけで評価することはその持続をかえって危うくするのではないか。

そこで本稿では、地域のコミュニティ形成の基盤として近年注目されている京都の地蔵盆について、「信仰」という側面から人びとと地域コミュニティの接続のあり方について理解することを試みる。少なくとも京都の地蔵盆では、特定の宗教や宗派に限らず人びとが行事に参加しており、宗教行事としての側面が参加者にあまり強く意識されていない。しかし、地蔵盆は地蔵を祀るという行為を中心とした「信仰」に根ざしており、だからこそ永らく続いてきたことも確かである。

「信仰」とは、ある宗教の教えや規則に従って人びとが行動することである。歴史において「信仰」の様態は常に社会的なものであり、その社会での宗教的枠組みによって個人の特性も作られてきた。例えば、16世紀初頭、カルヴァン主義で提唱された予定説は個人主義の台頭を促し、近代市民社会の成立に貢献したことが知られる。また、マックス・ヴェーバー(Max Weber, 1864-1920)が『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で論じた、信仰が育てる人間の特性(職業倫理、正直、節約等)が近代資本主義の成立を導いたとする説はあまりにも有名である[Weber1905=1938]。日本でも、平安末期以降の宗教の変化(仏教の世俗内易行化)が現在もみられる経済行動と経済システムの特質の源流をなすという指摘がされる等[寺西 2014]、欧米とは異なる形での社会の基盤としての宗教の役割が論じられてきた⁴。

現代の日本では、宗教への所属・参加の度合いが低下していることから「信仰心の希薄化」が指摘されている。このことは社会・経済の発展とともに宗教への参加率が低下するという、いわゆる「世俗化説」とも整合的である。一方で、宗教への所属・参加(宗教行事への参加率等で表される)は必ずしも信仰心の深さとは一致せず、経済に対して前者にはマイナス、後者にはプラスの影響があるという指摘もなされている⁵。これらの指摘を踏まえると、「信仰心」は社会への影響をなお失っていないが、公的領域での出来事としての宗教への所属・参加が減退し、「信仰」がますます外的なものとのつながりを失い内面的な経験としてのみ深められることは自然の流れであろう。このような傾向を踏まえ、現代社会の問題として「信仰」を捉え直すことが、地蔵盆という生活文化の長期的な視点からみた継承に欠かせないのではないだろうか。

第2章では、「信仰」を知覚経験の働きである「想像力」と結びつけ、「信仰」を「宗教的なもの」という現代社会の普遍的問題として捉え直したデューイの宗教論をたどる。次に、京都における地蔵盆の変遷について概観し、時代の変化のなかで地蔵盆を通して人びとの「想像力」がどのように発揮されてきたかを考察し、昨今の「再発見」の背景を整理する。第3章では、現代の地蔵盆における人びとの相互作用に焦点を当て、地蔵盆を通じた共同性の範囲の変化を分析する。地蔵盆が特定の個人や私的な領域での相互作用を超えて多様な人びとに影響を与え、行事への参加や運営への協力を促し、地域社会や公的領域での相互作用へと到る様を描出する。第4章では、本稿で得た知見が地蔵盆と生活文化の継承に対して示唆する事柄を示す。

2. 京都の地蔵盆の変遷にみる「想像力」

2.1 現代社会における「宗教的なもの」としての地蔵盆

(1) 「宗教的なもの」と適応

地蔵盆は仏教における地蔵菩薩への信仰から派生した行事であり、「信仰」を核として人びとと事物を結びつけたり隔てたりして地域コミュニティの編成に関与している。この「信仰」を核とした共同性が、地蔵盆を語るうえで欠かせない特徴である。本稿では「信仰」を、思想家ジョン・デューイ(John Dewey, 1859-1952)が言う人間の経験の一部としての「宗教的なもの」(religious) [Dewey1934=2011, p.4]として捉え、特定の宗教や宗派を意味する「宗教」(religion)とは区別する。デューイは「信仰」を「理想」

への献身と捉え、「宗教的なもの」の価値の核心は、理想のために人びとが自己および物理的・社会的環境を変え続けていこうとする態度である「適応」(adjustment)にあるとしている⁶。このような宗教の核心を「適応」という帰結に置いたデューイの枠組みは、社会における機能や役割に着目した宗教の捉え方であり、先述したヴェーバー等の社会学的研究に通ずるものがある。一方、人類学等では宗教の存在そのものに着目した研究が行われているように⁷、デューイの枠組みもまた人びとの行為や関係性を通じて実践的に構築されていく存在として宗教を捉えようとする。このように、デューイの宗教論は共同体を支持する機能を考慮に入れながらも、社会編成の要因が複雑化した現代において宗教の存在を実体的に捉えようとするものであると考えられ、本稿では基本的に彼の枠組みに沿って論を進めることとする。

(2) 信仰と想像力

デューイはまた、「信仰」における「理想」とは、人びとの「想像力」(imagination)によって捉えられ、「想像力」とは、人びとが「理想」を見出し創造する力であると述べている[Dewey1934=2011, p.27]。「信仰」は一般的に、直接的に知ることや見ることのできないものを、それらに代わる方法で確信することとみなされてきた。デューイは、信仰におけるこういった目に見えない事柄を、想像力によって心に描いた「ビジョン」(vision)と捉え、「信仰」と知覚経験の働きである「想像力」を結びつけて論じた[Dewey1934=2011, p.31]。このような捉え方は、信仰を現代社会の問題としても考える上で重要である。と言うのも、古今東西の宗教に見られる、集合的な共同体意識の中で見出された、理想とする生き方や価値観に沿って生きようとする人びとの態度は、芸術や科学、善き市民性(citizenship)のなかにも見出すことができ、したがって、それらもまた現代社会における「宗教的なもの」(religious)の問題となりえるからである。

(3) 創造的想像力

デューイはさらに、特定の恣意的な関心に導かれた想像力である「空想」(fancy)と世代や地域を超えた「あらゆる人に共通(common)の関心」が導く「創造的想像力」(creative imagination)を区別している。この「共通の」という部分が、「信仰」の指し示す共同性であり、さしあたり個人が抱くものであるはずの「信仰」が共同性を持ちうること、そして「信仰」を共同体の問題として捉えることの根拠となっている⁸。

我々の「内なる自然」、すなわち「人間性」(human nature=人類)は「外なる自然」

(nature)と相互作用する。この相互作用がデューイの言う「経験」であり、外なる自然は「生・物理的環境」と「社会的環境」の両方を含む。「経験」の背景にはこの相互作用を包括する「大自然」(Nature)があり、人類は自然との相互作用を通じて大自然とイマジナティブに相互作用する[Dewey1929=2021]。このイマジナティブな相互作用(imaginative interaction)、すなわち「(創造的)想像力」とは、人間(の内なる自然)が外なる自然と関わりあうなかで、知覚で把握されたものを集合的な共同体意識にあるもの(記憶、理想)とあわせ現在の経験として再構成する力であると理解できる。それは、「他者や自然との接続の感覚」、「より大きな共同体に参加しているという感覚」を定式化したものであるとも言われる[谷川 2021, pp.70-71]。

(4) 想像力＝他者や自然との接続の感覚

このように想像力を、知覚されたものを再構成し、「他者や自然との接続の感覚」を得る力であると捉えたとき、デューイにとっては、社会的環境の探求と改革(民主主義社会の実現)が生・物理的環境に優先した。このことはデューイが、大衆社会の成立という激しい社会変動を経験した世紀転換期のアメリカを生きたことと関係している⁹。激しい社会変動の時代には、集団の規模が拡大したり、構成員の価値観の差異や利害の不一致が増大し、そのような社会的環境の下で重要度を増した想像力は様々な形態をとってきた¹⁰。このような社会的不確実性の高まりは少子高齢化、人口減少等を背景とした社会構造の転換期を迎えた現代日本にも当てはまる。デューイが言う「創造的想像力」を導くのは人びとの「関心」であり、しかもその関心は空想のように移ろうものではなく、世代や地域を超えうる共同性をもった「あらゆる人に共通(common)の関心」であるとされるが、そのような関心ははたして可能であろうか。

2. 2 京都における地藏盆の成立と変遷

(1) 地藏菩薩

地藏はサンスクリット語では「クシティ・ガルパ」という。クシティは「大地」、ガルパは「胎内」、「子宮」の意味である。地藏菩薩について記した經典のうち『大乘大集地藏十論経』10巻(唐・玄奘訳)、『占察善悪業報経』2巻(隋・菩提灯訳)、『地藏菩薩本願経』2巻(唐・実叉難陀訳)は「地藏三経」と呼ばれ、地藏信仰の中心經典とされる[速水 1976, p.12]。その内容をごく簡潔に要約すると、地藏菩薩には、1. 救済能力がきわめて高く、2. 定位置をもたないという特徴がある。「五濁悪世の無仏世界の菩

薩」とも表されるように、地蔵菩薩は、仏教において、衆生がその業の結果として輪廻転生する6種の世界、すなわち「六道」(地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天)のどこにでも現れ、あらゆる人びとを救済するという誓いを立てている。

(2) 地蔵信仰

平安時代末期、それまで貴族の間のマイナーな信仰であった地蔵信仰が民衆のあいだにも発生し、地蔵講・地蔵会を通じて広まった。また、『今昔物語集』には地蔵菩薩が「小さき僧」「若き僧」の姿で現れたという説話がいくつも収められている。

中世になると、阿弥陀浄土教と併存しつつ民衆や武士の間に地蔵信仰が定着する。この頃、様々な姿かたちで地蔵菩薩が姿を表し、人びとを救済したという逸話が残される(地蔵の看病、地蔵の田植、戦場の地蔵等の「身代わり地蔵」の逸話)。

中世末期から近世にかけては、地蔵がもたらす現世利益への過剰とも言える期待とともに多種多様な意味づけをもった地蔵が全国で誕生する。代表的なものだけでも、追善供養、子安地蔵、水子供養、境界神(道祖神)、町内安全(火の用心)、延命地蔵(身代わり地蔵)等がある。このような地蔵信仰の民俗信仰化は、上述した地蔵菩薩が備える特徴(1. 高い救済能力、2. 定位置を持たない)と、地蔵菩薩に救いを求める力なき民衆の想像力があわさることで起きたと捉えられる。

例えば、『西院河原地蔵和讃』では、夭折した子どもの霊が賽の河原に集まり、地蔵がそれを地獄の鬼から守護するという有名な物語が唱われている。ここでは、賽の河原という此岸(この世)と彼岸(あの世)の境界領域、そして声を持つ前に亡くなった人びと(夭折した子ども)という、救済の手が届かない場所や人びとの前にさえも姿を現して救いの手を差しのべる存在として地蔵菩薩の姿が描かれている。

また、17世紀半ば(1665年)に書かれた『山城州宇治郡六地蔵菩薩縁起』には、6つの地蔵を鞍馬口の上善寺と他の5ヶ所に祀ったという話があり、六地蔵めぐりについても触れられている。6つの地蔵があるのが京都の街道口にあたることから、こうした境界に地蔵を祀ることで外部の災いが侵入することから京都の街を守ろうとしているようにも見える。ただし、それ以前に六地蔵めぐりがなかったとも断定しがたく、地蔵の数や位置も史料によって一致しないようなので、定かではない。

(3) 地蔵盆の成立と展開

京都の地蔵盆が初めて記録に現れるのは曹洞宗の僧侶・鈴木正三が記した『反

古集』(1638)であったと言われる。当時は「地蔵会」、「地蔵祭」等と呼ばれ、拾ってきた石仏や石ころを地蔵に見立てて祀る遊びが子どもたちの間で始まり、流行した。17世紀以降、京都のまちが都市的発展を遂げるなか、急増した土木事業の際に地中や川底、御土居等から石仏が多数発見されると、それらが地域の人びとの手によって町共同体の地蔵として祀られる。19世紀初頭には町の辻ごとに木戸門とともに地蔵を祀る堂が建てられ(図2)、地蔵盆も市中に町共同体の年中行事として広く定着している様子が様々な文書や文学、絵巻等に描かれている。このように、多数の地蔵が「発見」され、町共同体によって祀られたことが、地蔵盆が一時の流行に終わらず、定着していった理由であるとも言われる[村上2017, p.57]。

ところが、近代に入ると、明治4(1871)年10月の京都府からの布達により、多くの石仏が撤去・売却の対象となる。西洋社会に倣い近代化を押し進めようとする当時の公権力が、地蔵盆を新しい時代にふさわしくない「旧習」とみなし、路上に祀られた地蔵等の撤去を指示したのである。また、翌年7月には送り火や千日参り、六斎念仏等の盆行事全般を停止する趣旨の布達も行われる¹¹。布達を受け、町共同体の地蔵は路上から寺院や学校、路地奥等へ移動し、地蔵盆は一時的に廃れる。しかし、明治16(1883)年7月3日の布達により、上述の布達が撤回されると、地蔵盆は公式に再開される¹²。他の盆行事全般とともに復活したため、この頃から現在のような「地蔵盆」



図2 近世の京都の街並みと地蔵(「三条油小路町西側町並絵巻」(部分)、1820(文政3)年、京都府立京都学・歴史館蔵、京の記憶アーカイブより): 図の右側、町の境界に木戸門と地蔵堂、子どもを抱えた女性の姿が描かれている。

という名称が一般化していったと言われる¹³。

その後も地藏盆は様々な危機や苦難に直面するが、その意味や形を変えながら現代に受け継がれている。明治 35 (1902) 年には、当時流行した伝染病(コレラ)の感染予防のため地藏盆における食品の供物が禁止され、代わりに金銭や物品による供物となる。そして、供物のお下がりの配布先を決めるときの余興として福引が始まり、後には「ふご降ろし」と言われる、景品を入れた畚(ふご)を紐等に伝わせて向かいの建物の 2 階から降ろしてくる演出も流行する。現在では地藏盆の定番行事となっている福引は、当時の感染対策をきっかけとして生まれたのであった。

第二次大戦下には物資統制により地藏盆は規模を縮小しつつも継続し、戦後は人口増加、経済成長の時代に入り地藏盆も大勢の子どもや大人で一気に賑やかになり、子どもを楽しませるための手品や紙芝居等娯楽的要素が大きくなる(図 3)。昭和 30 年代～50 年代の地藏盆では、町内に櫓を組んで夜は盛大に盆踊りを行っていた。

近年は、住民の高齢化や少子化による影響が地藏盆にも及んでいる。運営を担う町内会・自治会員の高齢化が進み、町内の子どもの数の減少によるモチベーション低下も相まって、地藏盆の開催に対する住民の負担感が大きくなっている。さらに、市中心部では 1990 年代初頭から 2000 年代にかけ都市開発が激化し、新規建設されたマンション等に流入した住民と既存の住民のあいだで地域の行事に対する意識の乖離が生じていく。地藏盆も行事の廃止や簡略化が進み、2020 年から続く新型コロナ禍はこの流れを加速させた可能性がある[前田 2022]。



図 3 昭和 30～40 年代の地藏盆の様子：路上で福引や「ふご降ろし」等の行事に興じる町内の大人や子どもたちの姿がみえる。[竹間自治連合会 2013]

2.3 地蔵盆の展開と「創造的想像力」

地蔵盆は時代の移ろいととも意味や形を変えながら続いてきた。表1に本節でみてきた各時代の地蔵盆の動向をまとめた。ここに、デューイが「宗教的なもの」の価値の核心として捉えた、理想のために人びとが自己および社会的・物理的環境を変え続けていこうとする態度、すなわち「適応」の具体的内容を見出すことができる。

現在は一般的となった「子どもの守り神」としての位置づけは、地蔵菩薩について記した経典等にはもともと存在せず、子どもの安全や健やかな成長を願うという地蔵盆の目的も、地蔵信仰の民俗信仰化を通じて獲得されていったものである¹⁴。先述した賽の河原の信仰が室町時代に起こった背景には幼児の死に対する観念の変化があったという指摘もあり¹⁵、そこに戦乱や飢饉・災害への恐れや失われた幼い命への悲しみがあったことは想像に難くない。地蔵盆の発生、展開・定着の頃にみられた子どもの遊びとしての地蔵盆の流行や民衆を救済する地蔵の姿を描いた数々の説話、そして地蔵を町共同体に据えるといった行為は、子どものあり方について民衆が創造した「理想」を現実投影する「創造的想像力」の働きであると捉えられる。そして、その働きに統一的な実体を与えたのが地蔵盆という行事であり、町共同体という空間であった。昭和期以降の地蔵盆の娯楽的要素の拡大や地域のコミュニティ形成といった位置づけ、さらには地蔵の移動・撤去といった現象は、人びとの恐れや悲しみの記憶が時代の変化とともに薄れていくことで現れてきたものであるとも考えられる。

表1 各時代の地蔵盆（〔村上2017〕〔師2015〕〔速水1975〕をもとに筆者作成）

時代	近世			近代			現代
	江戸初期	江戸中期～末期	明治初期	明治中期	大正～昭和初期	昭和中期・末期	平成～令和
背景	地蔵信仰の民俗信仰化	都市的發展、町共同体の成熟	近代化、西洋化	疫病の流行	戦時体制	人口増加・高度成長	少子高齢化、生活様式の変化
地蔵盆の展開	発生	展開・定着	一時廃止・復活	行事の一部転換	縮小・継続	拡大・変質	衰退・再編
具体的内容	・子どもの遊びとして地蔵会・地蔵祭が流行 ・地蔵が様々な姿で現れ民衆を救済する説話が描かれる	・地中から「発見」された地蔵が町共同体ごと に祀られる ・年中行事として地蔵会・地蔵祭が定着する	・布達により地蔵の撤去が命令され地蔵盆も一時中断する ・布達撤回後は復活し、盆行事として定着	・食品の供物が禁止され、金銭や物品に代わる ・供物のお下がり配布の際の余興として福引が考案される	・戦時体制における厳しい物資統制のなかでも、規模を縮小しつつ継続される	・子どもと親を楽しませるための娯楽的要素が拡大し、地域住民の親睦行事としての性格が強まる	・運営の負担感が増し、廃止・簡略化が進む ・学区単位の地蔵盆、文化遺産としての認定などの新たな動き

3. 現代の地蔵盆にみる人びとの相互作用

3.1 人びとの相互作用と共同性の範囲

人びとの相互作用についてデューイは、1. 「内なる自然」としての人 (human nature) が「外なる自然」 (nature) としての環境 (生・物理的環境、社会的環境) と相互作用 (interaction) する、2. 人と環境の相互作用自体を通じて人びとが環境と相互作用 (social interaction) する、3. 環境との相互作用を通じて環境の背後にある「より大きな自然」 (Nature) と相互作用 (imaginative interaction) する、という 3 つのレベルで捉えている。図4は、これに着想を得て、コミュニティにおける人と環境の相互作用の捉え方について筆者が以前に作成した図式[前田 2016]を修正したものである。

図4で、生・物理的環境は、山や海といった自然環境、建物や道路といった構築環境を含み、本稿でこれは具体的には町内を構成する物財・空間を指す。石仏や地蔵の祠といったモノとしての信仰対象もここに含まれる。社会的環境とは、地域における人間関係や組織・制度のことを指す。1. 個人的相互作用は、人が個人として環境に働きかけ、影響を受けるという個別的な相互作用であり、それを通じて個人の特性も育まれている。3. 想像的相互作用は、宗教実践(地蔵を祀る、地蔵盆を行う等)によって、信仰に関わる世界観や理想といった目に見えないものを現実に投影することであると捉えられる。本稿では以降、2. 社会的相互作用に主眼を置く。これは、共同体の他の誰かと環境の相互作用を通じてある人が環境と相互作用することである。本稿では、町内や学区における社会的相互作用(町内会や地蔵盆を通した他者や地域との相互作用)に着目し、それと共同性の範囲の関係について探る¹⁶。

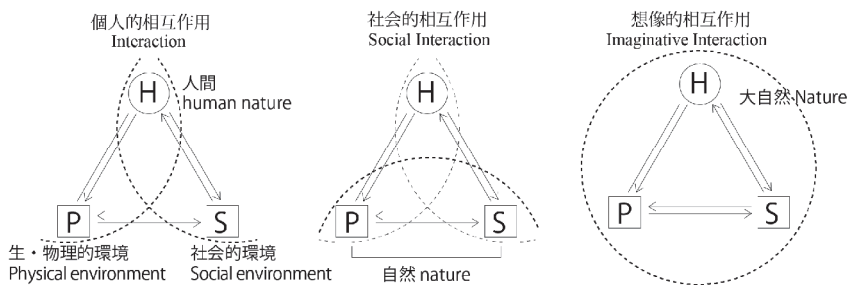


図4 相互作用の3レベル ([Dewey1934=2011] [前田 2016] をもとに筆者作成)

具体的には、京都において地蔵盆を担う町内ごとの自治組織である町内会・自治会への帰属・役割と地蔵盆に参加する人びとの範囲の関係、そして、町内会・自治会や地蔵盆の運営に対する人びとの応答について分析していく。前者は、地蔵盆を通じた相互作用が帰属・役割を超えて影響を持ちうるのか、後者は、影響を受けた人びとが地蔵盆の継続に対して何らかの行動を起こすのか、という問題と関わっている¹⁷。

3.2 町内の地蔵盆における相互作用

(1) 呼び掛けと参加

有隣学区、城巽学区、待賢学区という、いずれも京都市の都市計画上の中心エリア(通称「田の字」地区)とその近傍にある学区を対象として、京都の街なかにおける地蔵盆の実態調査を行った。この3学区では、町家・長屋や路地といった古くからの生活空間が多く現存するが、1990年代初頭から2000年代にかけてマンション・ビル開発が進み、現在は人口に占めるマンション住民(共同住宅世帯)の割合が高くなっている(有隣:80.4%、城巽:80.6%、待賢:56.8%)。近年、町内会・自治会や学区の活動を通じた地域のコミュニティ形成が困難になっているのは、住民の価値観や生活様式の違いによるところが大きく、そのことは上述した住宅形式の違いにも現れている。そのような傾向にもかかわらず、地蔵盆は現在も多くの町内で開催されており¹⁸、地蔵盆当日に筆者らが各町内を訪れ、行事の観察や参加者への聞き取りを行った。

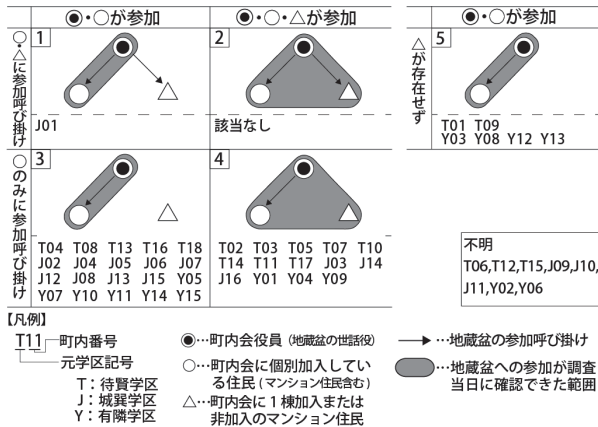


図5 地蔵盆への参加の呼びかけと実際 [前田・高田・森重・西野 2015]

図5は、住民間の相互作用の組み合わせをもとに調査対象とした68町内を分類したものである。まず、住民の属性を町内会・自治会活動への関わり(加入しているか、役員を担うことがあるか)によって「町内会役員(その年の地蔵盆の世話役)」「町内会に個別加入している住民(マンション住民を含む)」「町内会に1棟加入もしくは非加入のマンション住民」に分類し、つぎに、属性の異なる住民間の相互作用を町内会役員からの「地蔵盆への参加の呼び掛け」と住民の「地蔵盆への参加」によって整理した。最も多くみられたのは、町内会・自治会に個別加入している世帯の範囲で参加の呼びかけ、および実際の参加も行われているパターン(パターン3、5)であった。町内会・自治会に非加入の世帯には通常、地蔵盆の案内の声がかからない。また、マンション住民はそもそも非加入であるか、マンション一棟単位での加入といった形式だけの加入の場合が多く、地蔵盆への参加の声もかからないことが多い¹⁹。一方、案内・呼び掛けがなくても地蔵盆に参加しているというパターン(パターン4)が一定数あることが確認された。これは町内会・自治会への関わりとは別の経路で地蔵盆に参加している住民が存在することを表し、地蔵盆を通じた共同性の範囲の拡大と捉えられる。このような参加が生じる要因としては、町内会・自治会として公式には声をかけていないが、知り合い等に個別に声をかけているという可能性があると考えられる。あるいは、声はかかっていないが飛び入りで当日参加した可能性も考えられなくはない。

地蔵盆を通じて共同性の範囲が拡大する要因として考えられるのは、まず、地蔵盆における行事の種類の豊富さと選択性、また、地蔵盆の町内における位置づけの



図6 地蔵盆における開放的な空間利用の例：路上をテントや縁台、提灯等で設えたり(左)、出格子の窓を外し、店の間と道路を一体的につかっている(右)。

多面性である²⁰。世話役の負担能力や参加者の興味関心等に応じて、行事の種類と位置づけが多様に組み合わせられ、地蔵盆は柔軟な形で開催されている。さらに、地蔵盆の会場となる場所の開放性も重要であると考えられる。地蔵盆の日には路上や寺院の境内、公園といった公的空間に加え、個人宅の敷地・室内やビル・マンションの敷地(前面の広場や玄関ホール等)といった私的な空間も地域に一部開放される。このように公共的・開放的な空間で開催されるため地蔵盆は人目に触れやすく、そのことが参加のきっかけを生んでいると考えられる(図6)。

(2)企画・運営への協力

A町、B町は、有隣学区に所在し、隣接する町内である。A町は人口75人(45世帯)、戸建て・長屋の住宅の割合が高く、居住歴の長い、高齢の住民が多い。B町は人口216人(150世帯)、町内にマンションが4棟(いずれも賃貸住宅)あり、居住歴の短い、比較的若い住民も多い。両町内の住民を対象としたアンケート調査を行い、住民間の相互作用を把握した。図7はその結果を、「ある年度の町内役員(地蔵盆の世話役を兼ねる)」からみて、「町内会の運営を担う住民」、「町内会の運営を担わない

参加	地蔵盆への関わり		町内会の運営を担う住民 (◎)	町内会の運営を担わない住民 (○)	町内会に加入していない住民 (△)	
	運営	具体的な関わり				
当日参加なし	関わりなし	—				◎ △
						A町：2人 B町：9人
	単方向参加あり	参加の呼びかけがあるが、当日参加なし	◎ → ○	◎ → ○	◎ → △	
			A町：0人 B町：0人	S町：0人 B町：1人	A町：0人 B町：0人	
双方向参加あり	運営への協力があるが、当日の参加はなし	◎ ← ○	◎ ← ○	◎ ← △		
		A町：0人 B町：1人	A町：1人 B町：1人	A町：0人 B町：1人		
当日参加あり	関わりなし	—				◎ △
						A町：0人 B町：0人
	単方向参加あり	運営への協力なく、当日の参加はあり	◎ → ○	◎ → ○	◎ → △	
			A町：0人 B町：0人	A町：1人 B町：3人	A町：0人 B町：0人	
双方向参加あり	運営への協力あり、当日の参加もあり	◎ ← ○	◎ ← ○	◎ ← △		
		A町：8人 B町：13人	A町：2人 B町：8人	A町：0人 B町：0人		

<凡例> ◎ ある年度の町内会役員 → 何らかのサービス ◐ 地蔵盆への参加

図7 地蔵盆への参加と運営協力 [前田・高田 2019]

い住民」、「町内会に加入していない住民」が、参加の呼び掛けに対して、地蔵盆に参加しているか、地蔵盆の運営に協力しているかという観点から分類し、それらの組み合わせを示したものである。その結果、A 町、B 町ともに、町内会の運営は担っていないが、地蔵盆の運営には関わっているという人びとが一定数いることが確認された(図 7 中のグレー網掛け)。このような関わり方は、地蔵盆に参加するだけでなく、運営の負担を担おうとするという意味で、地蔵盆を通じた共同性の拡がりの影響下にある人びとの積極的な応答であると捉えられる。近年、町内会・自治会への「フリーライド」が地域の運営を担ってきた住民から疑問視され、住民間の軋轢が深刻化するケースもある²¹。そのようななか、このような影響・応答関係は、運営の担い手確保につながり、地蔵盆と地域コミュニティの持続に資する可能性があると考えられる。

さらに、このような関わりには、町内に最近引っ越してきた住民や単身の高齢者等、地域との関わりが持ちづらいと一般的に考えられる人びとが含まれている²²。地蔵盆は町内に暮らす住民がお互いの存在を認識する機会となっており、地蔵盆に参加した結果、運営や手伝いへの意欲を示す住民もみられた。その他、何らかの事情があって町内会の運営を担うことができない住民も、地蔵盆では一定の役割を担っているケースがあり、地蔵盆が地域との関わりをもつ数少ない機会となっている。

このような関わりが生まれる背景として、まず、地蔵盆で行われる行事のうち住民が重視するものが町内や個人によって異なり、それぞれの事情や関心に応じて行事が意味づけられていることが挙げられる²³。それと同時に、住民が気軽に楽しめる行事があり、それらが住民の参加を促し、運営を担うきっかけとなっている²⁴。次に、住民が地蔵盆に関わる理由にも、住民としての責務であるため、子どもたちの楽しみのため、他の住民と交流するため等、町内や個人にそれぞれのものがある²⁵。このように、地蔵盆における行事の意味づけや地蔵盆への関わりには個別性があり、この結果は先に指摘した行事の種類の豊富さと選択性、町内ごとの行事の位置づけの多面性という、多様な住民の参加を促していると思われる地蔵盆の特徴が、個々の住民のレベルにおいても見出されることを表すものであると捉えられる。

さらに、地蔵盆に関与したきっかけは、A 町、B 町ともに、「子どもの頃から参加している」という回答が最も多く、つぎに、「役員になったこと」という回答が多かった。B 町では、「地蔵盆の様子をみて興味を持った」という回答もみられ、このような住民は

現居住地で地蔵盆に初めて触れたと思われる。しかし、他の多くの住民にとって地蔵盆は、以前の居住地の経験も含め、馴染みのある行事であったことが窺える。このことは、地蔵盆が、人口の流動性が高い都市部にあつて住民の共通の関心となっていることから、地蔵盆が市内で広く続いてきたこと自体が、地域への関わりを持つきっかけになっているという点において意義をもっていることを示している。

3.3 学区の地蔵盆

地蔵盆は京都では基本的に町内の行事として続いてきたが、近年は学区単位で地蔵盆を行うという動きもみられる。地蔵盆がない町内やマンションに住む子どもとその親を対象として、小学校の交流スペースや地域の集会所等を会場として学区の自治連合会や民生児童委員会等が主催者となり地蔵盆を行っている。上述した3学区でも、学区単位の地蔵盆が行われている[前田 2013]。

有隣学区では2019年8月の最終土曜日(31日)に元有隣小学校の体育館を会場として「有隣地蔵盆」という名称で学区の地蔵盆を約10年ぶりに開催した(図8・左)。主催した学区自治連合会役員は当日の朝に体育館に祭壇を設置し、学区内の寺院から移動させてきた地蔵を祀る。参加者の受付を終えると、僧侶の読経にあわせて地蔵の前で数珠回し(長さ3~5mの大きな数珠を輪になった人びとが読経にあわせて繰り返す行事)を行う。読経の後はおやつ(お菓子、かき氷)、ゲーム(ボールすくい、ヨーヨー釣り、数当てゲーム)とつづき、夕方の4時には片付けをして終了する。このように、学区の地蔵盆も内容は町内で行っている地蔵盆とほぼ同じであり、開催の費用は自治連合会が学区内の個人や自治連傘下の団体に呼び掛けて集めた寄付に



図8 学区の地蔵盆 (左：有隣学区「有隣地蔵盆」、右：竹間学区「夏休み体験」)

よって賄った。学区地藏盆への参加者は役員が普段見かけない人びとが大半であったようで、学区内のマンションに住む子育て世帯であったと推察される。

また、有隣学区と同じく市内の中心エリア(通称「田の字地区」)に位置する竹間学区では、学区の民生児童委員会と社会福祉協議会の共催により、2019年に「夏休み体験」という名称で学区の地藏盆を開催した(図8・右)。小学校の夏季休業の終了が近づく8月下旬の平日(8月20日)、学区の自治会館を会場として、朝から役員が会場の設営を行い、参加者の受付を行ったあと、「お地藏様体験」として僧侶の読経にあわせて数珠回しを行い、読経が終わると僧侶が地藏盆の由来等について話をする。その後、「エコ学習」と称して区役所の職員が環境問題について子どもたちと話し、最後はペットボトルボーリング、射的、たこせん、おやつつり、輪投げ等の「お楽しみ体験」があり、正午には全ての行事が終了する。会場の壁に貼られた「地藏」の絵は、役員が前日に画用紙に描いたものであるという。また、会場には参加者が記念撮影できるスポットも用意されていた(2020年、2021年は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて中止、2022年に再び「きつずばあく」として開催)。

有隣学区の学区地藏盆は地藏盆において「定番」と言える行事を中心としている。それに対し、竹間学区の学区地藏盆はエコ学習(2019年)や人形劇(2022年)等を取り入れ、子どもの学びや楽しみをより重視した内容としている。このようなアレンジは、地藏盆の宗教行事としての側面をあまり目立たせない配慮であるとも捉えられる。とは言え、子育て期の若い世帯にも、地藏盆が宗教行事であるという感覚はあまりなく、むしろ、京都らしい風習を子どもと一緒に楽しめる機会と捉え、学区の子育て支援ネットワークや開催案内のチラシ等から情報を得て参加しているようである。

3.4 その他の地藏盆

地藏盆が町内以外の主体によって開催される場合もある。上述したように、学区という町共同体の連合体、上部組織が主体となる場合もあれば、逆に、町内の特定の個人や集団によって祀られている場合もある。例えば、コロナ禍で例年のように住民が集まって地藏盆を開催することが困難であったため、日頃から地藏の管理をしている店の店主が、地藏盆の時期に店の前の祠に安置された地藏を個人的に祀り、僧侶を呼んで読経しているというケースがみられた。また、町内の住民が減少し、わずか数名で地藏盆を継続しているというケースもみられた²⁶。このようなケースは、ビル・

マンション開発等で町内の居住人口が著しく減少するか、あるいは町内会・自治会に非加入の住民が大多数となった市中心部の町内にみられる。町共同体の行事という形式をとっているが、町内会・自治会自体が消滅の危機にあり、実際には限りなく特定の個人による行事に近い形であるが、それでも地蔵盆が続けられている。

この他、寺院の境内や商店街のイベントスペース等で開催される地蔵盆もあり、これらは寺院や地元の企業が主催あるいは協賛しており、京都に特有の生活文化として行政もイベントの広報等に協力している場合もある。

4. おわりに：地蔵盆における「想像力」とその継承への示唆

個人や特定の集団による信仰として完結する地蔵信仰は、地蔵盆という形をとることで、地域における人びとの関係やコミュニティの形成と関わっている。本稿では、その関わりの背景について、デューイによる「宗教的なもの」の議論や、地蔵盆の成立と変遷、そして筆者による地蔵盆の実態調査の結果をもとに検討してきた。

地蔵盆の成立と変遷をふまえ、地蔵盆の多様な展開は、地蔵菩薩の性質と、民衆の理想(力なき人びとへの救済、公権力への抵抗等)を結びつける、「(創造的)想像力」の働きによるものであるという見方を示した。想像力の所産である「共通の関心」には、例えば「地域の安全」や「子どもの健やかな成長」といった、今日の地蔵盆においても広く共有されているものがある。しかし、そうした「共通の関心」自体も実は一様ではなく、時代の変化とともに生成、強化され、時に忘れられ、地蔵盆を担う町共同体ごと、さらには個人によって様々に意味づけられてきた。現在みられる地蔵盆の様々なあり方は、そのようにして地蔵盆が辿ってきた多様な展開の経路を表していると捉えられる。そして、筆者による実態調査にもとづいて示した、地蔵盆を通じた共同性の範囲の拡大は、ある一時点の観察結果ではあるが、地蔵盆を通して人びとの想像力が「共通の関心」を導く、具体的な様子が現れたものであると考えられる。

このように地蔵盆では、地蔵菩薩という信仰対象のもつ性質、人びとが地蔵盆を通して現実に投影してきた理想、そして町内の現住民や空間の特徴といった要素が組み合わさり、その時々「志向性」をもった場が形成されてきた。ここで言う志向性とは、地域共同体にとっての地蔵盆の位置づけや個人々人にとっての行事の意味づけにより、「外なる自然」としての他者や環境と人びとの関わり方を方向づけるものであ

る。地蔵盆に参加することは、そういった志向性をもった場を人びとが共有することであり、そして地蔵盆は人びとの相互作用の仕方に影響を与えたり、時には地蔵盆なしでは生じえないような相互作用(例えば、先述した町内会とは異なる経路での影響・応答関係)をもたらす。このようにして地蔵盆は場を通じて人びとの「想像力」(＝他者や自然との接続の感覚)を媒介しており、ある時代に同じ共同体にいた人たちが場を共有することで他者の想像力に触れ、その記憶を次世代につないできた。このように、地蔵盆における「共通の関心」とそれを導く想像力とは、時代や地域を超えて普遍的に働くものというよりは、先行する世代からつづく人びとの相互作用そのものを通して現在の人びとが他者や自然と関わろうとすることで繋がれてきたものである。そういった媒介の連鎖とでも言える現象は、近年における地蔵盆の新たな展開(町内における新たな位置づけをもった地蔵盆、学区の地蔵盆等)からもみてとれ、地蔵盆は「適応」を本質とする「宗教的なもの」として都市に息づいていると言える。

このように、地域共同体の想像力を媒介する存在として地蔵盆をみることは、その継承にどのような示唆を与えるだろうか。近年、「再発見」された各地の地蔵盆(町内の地蔵盆)は、それぞれの適応の結果として場所ごとの文脈を形成しており、そのことが変化に対して柔軟でありつつも、外部の人間(公権力や町外の人間等)の介入を防ぐ障壁となっており、地蔵盆を持続させる要因になってきた。一方で近年、新たにつくられる地蔵盆(寺院や商店街等でのイベントとしての地蔵盆、文化遺産等のシンボルとしての地蔵盆)は、特定の場所や文脈にあまり依存しないため、介入の障壁は高くない。したがって、地蔵盆に気軽に触れることで地域への関心を喚起するという点では有効であるが、接続しやすいぶん途切れやすくもある。このことを考慮すると、地蔵盆の長期的な持続の源となるのはやはり、場所に根ざし、それぞれの文脈を形成する、「地域共同体の想像力」であり、様々な支援・奨励策も、その醸成に最終的に資するべきであると考えられる。その意味で、例えば、学区単位の地蔵盆は、介入の障壁がさほど高くなく、かつ歴史的に互いに補完しながら地域の自治を担ってきた町内一学区²⁷という場所の文脈にも接続した地蔵盆の継続のあり方であり、一つの有効な手段であると考えられる。

- ¹ 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が2013年9月上旬から12月末にかけて行った「地蔵盆」に関するアンケート調査。市内の町内会・自治会長等6,627件を調査対象として3,684件の有効な回答を得ている（有効回収率55.6%）。
- ² 林は滋賀県を中心に近畿圏の地蔵盆を調査し、地蔵盆の受容と展開について民俗学的な検討をしている[林1997]。京都の地蔵盆については、清水による歴史的考察があり[清水2011]、これを受けて村上が、地蔵盆がいつどのように始まり、受容され、維持されていったかを特に近世以降の都市京都を対象として検討している[村上2017]。また、竹内は、京都における地蔵の配置に着目し、都市形成との観点から配置の原理を探るとともに、祭礼（地蔵盆）の変化について明らかにしている[竹内2020]。
- ³ 2014年11月「京都をつなぐ無形文化遺産」の第3号として地蔵盆が選定された（登録名「京の地蔵盆—地域と世代をつなぐまちの伝統行事」）。また、2019年3月「京都市レジリエンス戦略」では、6つの重点的取り組み分野の一つである「支え合い、助け合うまち」の基盤となる「地域コミュニティ」の活動として、学区コミュニティの活動、そして町内単位で行われる地蔵盆や門掃きが挙げられている。2021年10月に策定された「京都市SDGs未来都市計画」ではSDGsとレジリエンスの融合が謳われ、上述の6つの重点的取り組み分野が具体的な目標として掲げられている。
- ⁴ ヴェーバーが主張した宗教が経済成長に果たす効果は現代においても存在することが確認され、宗教経済学と言われる宗教と社会の相互作用を経済学のモデルと方法で説明する研究領域が注目されている（[Barro & McCleary 2019=2021] 等）。
- ⁵ 世界価値観調査と国際社会調査プログラムというよく知られた国際的調査のデータをもとに、宗教への所属・参加率（月当たり礼拝出席率）は経済成長と負の相関があり、宗教を信じること（来世、特に地獄を信じるか）が経済成長と正の相関をもつという結果を示している。このことは宗教への参加（教会によく行くこと）は、経済成長を促す信心（正直、節約、勤勉等）を育てるが、同時に経済活動の効率を低下させるため、結果として宗教性（所属・参加率の高さによる信心の深さ）の経済成長への影響は全体として弱くなることを表している [Barro & McCleary 2019=2021, pp.65-72]。
- ⁶ デューイによると「宗教的」とは、経験の宗教的性質、つまり「より良く適応」をもたらす経験の機能であり、デューイはそれを「より良く生きる態度」として論を展開している。すなわち「適応」(adjustment、環境に適応すること＝自分と環境を変えること)を、「適合」(accommodation、環境に適合すること＝自分を変えること)や「適用」(adaptation、環境を適用すること＝環境を変えること)と対比し、適合にみられる受動的(passive)や「あきらめ」、「屈従」、適用にみられる能動的(active)、「改作」といった態度とも異なり、より包括的、根底的で、われわれの全人格に関わるものであるとしている([Dewey1934=2011, pp.19-25])。また、適応を根拠とする宗教的態度である信仰は、われわれ自身が持っている多様な要素(＝欲求や関心)を構成し、調和させる働きがあり、その結果として、われわれを取り巻く諸条件のほうもわれわれに合わせて調整され、日常生活に安定と安らぎを与えると述べている[Dewey1934=2011, p.25]。
- ⁷ 石井によると宗教における妖術や呪術、精霊といった「近代的な合理性の外側にあるように見えるもの」を近代人はどのように理解ができるのかという問いに対して、それらが社会統合に役立ったり、社会的な緊張を和らげたり、人びとの不安や葛藤を表すといった、社会における「機能」や「役割」にもとづく説明が主流を占めてきた。しかし近年、それらの「存在」そのものに

目を向け、当の人びとにとっても、所与の信じるべき対象であるというよりも、行為や関係性のなかで実践的に働き、使われ、忘れられ、また生み出されるものとして捉えようとする、認識論から存在論へという転換が起きているという[石井 2019]。

⁸ デューイの哲学、宗教論 ([Dewey1934=2011]等) を「信仰」と「想像力」をキーワードとして読み解いた研究として谷川によるものがある [谷川 2021]。

⁹ このような社会変動の時代を生きたデューイの仕事は、イギリスが急激に工業化・都市化していく時代に活動したワーズワースやコールリッジといったロマン派詩人、そして彼らとロマン主義的思潮を共有するジョン・ラスキンやウィリアム・モリスといった人物の仕事とも重なるという指摘がなされている。彼らロマン主義者が現実の問題への応答としてそれぞれ展開した言論や詩作、実践におけるキーワードが「想像力」であり、彼らはその概念を「創造性」の観点から再定義してみせた [谷川 2021, p.214]。

¹⁰ 例えば、「国民」の想像のされ方に着目してナショナリズムの本質解明を試みたベネディクト・アンダーソンは、国民国家は、それまで社会の組織化に役割を果たしていた宗教的共同体と王国が衰退するにつれ登場した共同体であるとしている。そこでは顔を合わせたこともない人びとが、国家によって定められ、「国民」というイメージとして心のなかに想像された共同体のもとで組織化されている [Anderson 1983=2007]。また、移民の大量流入、モータリゼーション等を背景に急激な都市化が起きた 20 世紀アメリカにおいて、アーヴィング・ゴフマンは、見知らぬ者どうしが対面的に対峙した時の独特の関係原理を「儀礼的無関心 (Civil Inattention)」と呼んだ [Goffman1963=1880, p.96]。ゴフマンがそれを「同じ場所にいる人をただ居合わせた人と捉え、他の社会的特徴をまったく無視する対人法」と定義したように、他者への意識的な無関心もまた共同体における異質な者どうしの共存原理となり得る。これと関連して上田は、京都の町家街区における人と人、人と空間の関わり方の特徴を「義理の共同体」と呼んだ [上田 1976]。そこでは町内の行事 (十日汁、お千渡、地藏盆等) の中で、私的なつきあいでさえも様式化・形式化され一種の公的な交流となっており、個人が分担する責任が義理と礼儀が要求する範囲に制限されている。そのような関係性は町内の行事だけでなく、日常的な行動規範や京詞、鰻の寝床、格子窓等の「人工的な相互緩衝物」にも通底しており、それらが異質な者たちの共同居住を支えてきたという。

¹¹ このような、路傍の石仏の撤去や地藏盆等の盆行事を禁止する布達は、京都だけでなく近畿圏で明治初期に相次いで出された [林 2008] [村上 2016] [田野 1994]。

¹² 地藏堂等は換金して当時設立の準備が進められていた小学校の運営資金に充てるはずであったが、町内の個人が石仏を買い取り、自宅で保管し、ひそかに祀り続けていたケースもあった [村上 2017, pp.133-136] [竹内 2020, p.58]。

¹³ 「地藏盆」の呼称について、近世に行われていた「地藏会」、「地藏祭」が明治初期の布達によって一度断絶し、明治半ば以降に「地藏盆」として復活したとする説がある [林 2008]。しかし、近世の末期に既に「地藏盆」という表現も使われていたという記録がある。これについて、当時の新聞が盆行事全般の禁止令撤回を伝える記事の中で「地藏盆」という名称を用いたことが普及のきっかけとなり、「地藏会」、「地藏祭」に代わって一般化していったとする指摘がある [村上 2017, pp.154-158]。

¹⁴ 地藏菩薩は中世後期から近世にかけて様々な民俗信仰と習合し、本来の経説をこえた

独特の信仰を形成したと言われ、そこでは特に、地蔵を子どもの守護神とする等、地蔵と子どもを結びつけた信仰形態が特徴的であるとされる〔速水 1975, p.152〕。

¹⁵ 速水は、室町時代になって賽の河原の信仰がおこる背景には、幼児の死についての観念の変化があったという説を紹介している。くわえて、それまでにも『今昔物語』の説話では地蔵が「小さき僧」「若き僧」の姿で表れており、こういった地蔵と子どもの通有性が、地蔵がとりわけ子どもを守護するという観念の最大の基盤になったと述べている。一方で、地蔵が子どもの姿を借りるとは地蔵経典には示されていないことから、そこに何らかの独自の理解が伏在しているとも述べている。〔速水 1975, pp.157-158〕

¹⁶ 本節の内容は、筆者らによる既往の研究成果〔前田・高田・森重・西野 2015〕〔前田・高田 2019〕〔前田 2019〕にさらに考察を加え、新たな論考としてまとめたものである。

¹⁷ デューイはまた、ダーウィンの進化論における「環境適応」の考え方に着想を得て、生物有機体とそれを取り巻く環境は、相互作用という関係を超えて相互規定的な関係にあるという考え方（トランザクション）をもとに人間社会における個人と集団の関係を分析している。『公衆と諸問題』（1927）において、トランザクションが当事者を超えて影響を及ぼすとき、「公衆」（the public）という利害関係のある事柄について政治に働きかけを行う集団が形成されることを論じた。デューイは「即時的公衆」（トランザクションの緒結果の影響を受けているだけの第三者の集合態のことであり、公衆の客観的側面だけを満たす不完全な公衆）と「対自的公衆」（トランザクションの緒結果の影響を受けていると認識した上で、それに対して組織的に何らかの取り組みをしなくてはならないと理解している第三者の集団。公衆の客観的側面と主観的側面の両方を満たす完全な公衆。）を区別し、人びとの連合関係が親密であるほど（家族、友人、近隣といった「面識的連合関係」）、「対自的公衆」が形成されにくく、逆に、連合関係が疎遠であるほど、「対自的公衆」が形成されやすくなるとした。〔Dewey 1927=2014〕

¹⁸ 地蔵盆に先立ち、3学区・計 84 町内の町内会長を対象として行ったアンケートでは 81 町内から有効な回答が得られ、その約 84%にあたる 68 町内で地蔵盆の開催が確認された。これを踏まえ、2013 年の地蔵盆当日に計 62 町内を筆者ら調査員が訪れた。

¹⁹ 1 棟加入とは、マンション居住者の町内会費を戸別ではなく、マンション一棟の会費としてまとめて納入するようなケースである。今回の調査で「町内会に 1 棟加入もしくは非加入のマンション住民」にも声がかかっている例（パタン 1、2）は一事例（J01）のみであった。ちなみに、ある程度の規模になると、マンションだけで町内会を組織する場合もある。この場合、既存の町内会からは完全に独立した組織となるため、今回は検討の対象としていない。

²⁰ 地蔵の「お飾り」や僧侶による「読経」といった地蔵盆において欠かせない行事に加え、参加者への「おやつ配布」や「お下がりの配布」といった手軽にできて誰でも参加できる行事が多くの町内で行われている。他の「数珠回し」や「福引」（子ども用・家庭用）、「遊び」、「ゲーム」、「食事」といった行事の開催の有無は町内によって異なり、町内の人口構成（特に子どもがいる世帯の数）や住民の興味関心に応じて取捨選択されている。町内での地蔵盆の位置づけも、「子どもの安全祈願」や「先祖の供養」といった従来からのものに加え、「地域住民の親睦」や「町内の伝統行事」といったものがみられ、多面化している。他にも「地蔵があるので」、「世話役がまわってくるので」（続けている）という場合もあり、これは続けていくことへの義務感、あるいは過去から続いてきたものへの畏敬や関心の表れと捉えられる。〔前田他 2015〕

21 例えば、町内会の行事に参加はするが、その運営に対する協力（役員になる、行事の企画・実施を手伝う等）には消極的な住民の存在が地域住民間の軋轢の原因となっているケースがあり、これは地域の運営を担ってきた一部の住民の負担への「フリーライド」の問題として捉えられる。

22 例えば、B 町のマンションに最近引っ越してきたある世帯は、最初は地蔵盆という馴染みのない行事に戸惑いながらも準備や当日の設営の手伝いをするうちに徐々に町内に溶け込んでいったという。また、A 町に単身で暮らすある高齢者は、配偶者を亡くし、体力も低下してきたこともあり、現在は町内会の運営は担っていないが、地蔵盆については過去の経験を活かして準備や当日の運営に協力している。さらに、B 町の共同住宅に暮らすある単身高齢者は、地蔵盆の運営には関わらなくなったが、町内にある地蔵の祠の掃除やお供えの交換等、地蔵の日常的な管理を行っている。[前田他 2019]

23 住民が重要だと捉え、かつ参加も多い行事は、A 町では「数珠回し」、「家庭用福引」、B 町では、「お飾り・片付け」、「子どもの遊び」であった[前田他 2019]。

24 行事のなかには特に重要ではないと住民が捉えられているが、地蔵盆の日に多くの参加がみられる行事があり、それは A 町では「子ども用福引／おやつ配布」、「ゲーム、クイズ」、B 町では、「お飾り・片付け」、「子どもの遊び」であった[前田他 2019]。

25 A 町では、「地蔵盆を祀る」、「先祖供養」、「町内親睦」、「役員としての務め」、「子どものため」といった回答が多く、最も多かったのが「町内の伝統行事であるから」であった。これに対して B 町では、「町内の親睦」という回答が最も多く、これに「地蔵を祀る」、「子どものため」、「町内の伝統行事であるから」が続く。この他、「(福引の) 景品がもらえるから」という理由を挙げる者も一定数おり、一方で、「先祖供養」という回答は A 町とは違ってごく少数であった[前田他 2019]。このように居住年数が長い住民が多い A 町では、地蔵盆は町内で長く続いてきた行事であり、その運営を担うのは住民としての責務だと捉えられていることが窺える。また、A 町では近年、子どもの数が少なくなっているが、子どものための行事であるという意識は薄れておらず、地蔵盆を次世代に残そうとする意欲が窺えた。一方、居住年数の短い住民も多い B 町では、住民どうしが知り合い楽しみを共有する機会として地蔵盆が捉えられ、そのことが参加の動機となっていることが窺えた。

26 先述した 3 学区（有隣、待賢、城巽）を対象とした調査でも、地蔵盆の規模（地蔵盆への参加を呼びかけた人数）にはかなりの幅があり、最多は有隣：83 人、待賢：112 人、城巽：135 人、最小は有隣：3 人、待賢：20 人、城巽：13 人という結果であった（3 学区の平均は約 50 人）。数人～10 人程度の規模の地蔵盆は個人や特定の集団による行事という性格が強いものとなっている。[前田・高田・森重・西野 2015]

27 京都の地域コミュニティでは「町内」と「学区」という、起源が異なるコミュニティの単位が重なりあう構造のもと、自治の文化が育まれてきた。「町内」は、室町時代、応仁の乱によって治安が乱れた京の都で、通りを挟んだ家々が辻ごとに木戸門を設け自警のための集団（両側町）をつくることを通じて、自然発生的に生まれたものである。「学区」は、明治時代、日本で初めての近代的学校制度が京都で導入する際に行政によってつくられた町内の連合体（番組）が起源である。当時の小学校は行政、警察、消防等の機能も兼ねた地域自治の拠点であった。現在、小学校の施設自体の大半は統廃合によって無くなっているが、「学区」は現在も存続し、地域自治の単位として機能している。

＜参考文献＞

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983 (ベネディクト・アンダーソン著、白石隆、白石さや訳『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早山、2007)
- Barro, Robert J. & McCleary, Rachel M. *The wealth of religions : the political economy of believing and belonging*, Princeton University Press, 2019 (ロバート・J・バロー、レイチェル・M・マックリアリー著、田中健彦訳『宗教の経済学—信仰は経済を発展させるのか』、慶應義塾大学出版会、2021)
- Dewey, John. *The Public and its Problems*, 1927 (ジョン・デューイ著、阿部斉訳『公衆とその諸問題—現代政治の基礎』、ちくま学芸文庫、2014)
- Dewey, John. *A Common Faith*, Yale University Press, 1934 (ジョン・デューイ著、粟田修訳『人類共通の信仰』、晃洋書房、2011)
- Dewey, John. *Experience and Nature*, New Edition, W.W. Norton & Company, 1929 (ジョン・デューイ著、粟田修訳『経験としての自然』、晃洋書房、2021)
- Goffman, Erving. *Behavior in Public Places-Notes on the Social Organization of Gatherings*, Free Press, 1963 (アーヴィング・ゴフマン著、丸木恵祐、本名信行訳『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』、誠信書房、1980)
- Weber, Max. *Die protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus*, 1905 (マックス・ヴェーバー著、梶山力訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、有斐閣、1938)
- 石井美保「現実と異世界—「かもしれない」領域のフィールドワーク」、松村圭一郎、中川理、石井美保編『文化人類学の思考法』、pp.57-68、世界思想社、2019
- 上田篤『京町家 コミュニティ研究』、鹿島出版会、1976
- 清水邦彦「京都の地蔵盆の宗教史的研究—祖霊観解明の一手がかりとして」、比較民俗研究、第25号、2011
- 竹内康「京都における地蔵の配置に関する研究—都市形成と世嗣の配置の関係に着目して」、京都大学博士学位論文、2020
- 谷川嘉浩『信仰と想像力の哲学—ジョン・デューイとアメリカ哲学の系譜』、勁草書房、2021
- 田野登『大阪のお地蔵さん』、北辰堂、1994
- 竹間自治連合会『竹間こども風土記』、2013
- 寺西重郎『経済行動と宗教—日本経済システムの誕生』、勁草書房、2014
- 林英一『地蔵盆—受容と展開の様式』、初芝文庫、1997
- 速水侑『地蔵信仰』、はなわ新書、1975

- 前田昌弘「地蔵盆の運営実態と地域のレジリエンス向上に果たす役割に関する研究」、2012年度「未来の京都創造研究事業」研究成果報告書、pp.23-42、公益財団法人大学コンソーシアム京都、2013
- 前田昌弘、高田光雄、森重幸子、西野克祐「京都市都心部における地蔵盆の運営実態と参加者の多様性—レジリエントなコミュニティ形成に果たす地蔵盆の役割に関する研究」、日本建築学会計画系論文集、第80巻、第714号、pp.1833-1842、2015
- 前田昌弘『津波被災と再定住—コミュニティのレジリエンスを支える』、京都大学学術出版会、2016
- 前田昌弘、高田光雄「地蔵盆運営への関与からみた町内住民間の関係の冗長性—レジリエントなコミュニティ形成に果たす地蔵盆の役割に関する研究 その2」、日本建築学会計画系論文集、第84巻、第756号、pp.397-405、2019
- 前田昌弘「存在の質から環境を捉え直す—地蔵盆まちづくり試論」、建築と社会、Vol.100、no.1173、pp.30-33、2019
- 前田昌弘「新型コロナ禍の地蔵盆の開催実態」、京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会編『京都の祭り・行事—地蔵盆とコロナ禍の地域行事』、pp.28-31、2022
- 村上紀夫「近代初頭大阪における「地蔵」、祭祀史料研究会編『祭祀研究と日本文化』、塙書房、pp.283-303、2016
- 村上紀夫『京都 地蔵盆の歴史』、法蔵館、2017
- 師茂樹「京都の「地蔵」信仰の背景」、京都の「地蔵」信仰と地蔵盆を活かした地域活性化事業報告書、pp.15-21、2015